真・魔導戦記Seoul

マテマテフェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・魔導戦記Ｓｅｏｕｌ

【Ｎコード】
Ｎ１５４３Ｎ

【作者名】
マテマテフェイ

【あらすじ】
遂に行動を開始した星の断罪者達、次々と世界を消していく彼らの目的は…？
そして未だ行方を掴めない彼を探し、星降る谷を目指す

第1話世界崩壊への序曲（前書き）

星魔導伝説の続きです
主な登場人物はなのは、フェイト、ゼクス、ロイト、ゼロ、はやて、
コウ、霊守、星の断罪者です

第1話世界崩壊への序曲

なのは達がミッドチルダを飛び出した後、様々な次元世界から緊急コールが来る。
「どうかしたんですか？」
スバル達は呼ばれ、クロノの元へと来る。
「今、現在様々な世界から緊急コールが来ている…」
クロノが話すと、緊急コールがどんどんと消えて行く。
「なにが、起きているんだ？」
「聞こえますか…」
「ロイト君、どうかしたの？」
「現在、次元世界の各地によくわからない魔力反応が多数現れています。それに…」
途中で、通信は切れる。
「提督、何が起きているんですか？」
「そんな事、俺に聞かれても困る」
「私達が調べに行きましょうか？」
「ただでさえ戦力が不足しているのにこれ以上、裂ける訳がないだろう！！」
クロノが言うと、地球から緊急コールが来る。
「何だと…それは本当か…」
「どうかしたんですか？」
「地球は黒い膜で覆われてしまったようだ…」
クロノが言うと今度はエルガストへ向かった、フェイトから連絡が来る。
「フェイト…無事だったか」
「私達は平気だけど、エルガストに住んでいる人々が…」
フェイトが画像を送ると全員驚く
「なんてひどい事を…」

「これがあの人たちのやり方なんですか？」
「わからないけど…シグナム！！」
そこで突然、通信は切れる。
「フェイト…聞こえるか、応答しろ！！」
クロノが言うが、ノイズしか聞こえなかった。
「やっぱり、確かめに行った方がいいのでは…」
スバルが言うと、目の前にゼストが現れる。
「私ならば抜けても、支障はないはずだ。それに彼女からの了承は受けている」
「だが…危険だ。今、建物の外に出るのは！？」
いきなり血柱が立ち、ゼクスが現れる。
「急に現れて済まない。だが、緊急事態だ」
「こちらも今は、手が離せない状態だ。手短に話せ」
「次元世界がだんだんと消滅して行っている」
「そんな非現実的なことある訳が…」
クロノが言いかけると、レーダーから一つの世界が消える。
「本当だったみたいですね」
「それで君は何の用で来たんだ？」
「できれば、優秀な魔導師を貸してもらいたくこの場に来ました」
「それは無理な話だな。こちらも何分、戦力不足で君達に手伝ってもらいたいところだ」
クロノが言うと何者かが現れる。
「それなら、僕らがミッドチルダは守りますよ」
「俺達なら回復魔法はもちろん攻撃魔法も習得している」
ゼロとロイトは言う。
「だが君達の力、俺はまだよく知らないし…」
「僕らの力は信用してもらって平気です。何が何でもミッドチルダは守りますから」
ロイトに言われクロノはゼクスにスバル、エリオ、ティアナ、キャロを預ける。

「気をつけろよ。二人とも奴らは、君達でも余裕を持って戦える相手じゃない」
「わかってるよ、ゼクスさんこそ気を付けてくださいね」
「死んだ報告を聞いても、骨は拾いにはいかないからな」
「それとレイヴンとロイそれにデュークとの連絡も取れた。後で来ると思う任せたぞ」
ゼクスはスバル達を連れエルガストへと向かう

第1話世界崩壊への序曲（後書き）

行動を開始した星の断罪者そしてスウェンの行方を捜し彼女達は様々な次元を渡り歩く
次回第2話逃れられぬ宿命
血を流し戦いその果てに見るものとは…

第2話逃れられぬ宿命（前書き）

星の宿命それは決して逃れることのできない宿命

第2話逃れられぬ宿命

新魔法世界エルガスト
「すいません、あなた達にまで手伝ってもらって」
「レイヴンは、この世界の住民ですよね」
「まあ…一応、そう言う事になりますね」
「それじゃ、何があったのかわかりますか？」
フェイトが聞くと、レイヴンは下を向く。
「すいません。しばらくこの世界とは違う世界へ行っていたので…」
「いや別に平気だけど、君だけなんだよね」
「本当は後、デュークとラセツが来たんですけど途中でどこかへと行ってしまって…」
レイヴンが言うと片腕のない男が来る。
「お前…レイヴンか？」
「ロイ、無事だったのか」
「でもなんでここにいるんだ？」
「一応、故郷の危機だしさ。放ってもおけないしな」
レイヴンが言うと、フェイトはレイヴンに聞く。
「彼は？」
「あっこいつはロイ・グレイス。俺の親友で、ある国の王様だ」
「よろしく。でもいつの間にこんな綺麗な彼女を手に入れたんだ？」
「違う、ただの協力者だよ。ミッドチルダからの…」
レイヴンは顔を赤くしながら、否定する。
「フェイト・T・ハラオウンです。よろしく…」
「こちらこそ。あの襲撃の前なら、丁重な御もてなしができたのですが…」
「いえお構いなく。それより聞きたいんですが、星降る谷という世界を知っていますか」
フェイトに聞かれ、ロイは一冊の古文書を出す。

「あなたの探している場所へ行くには、あるものが必要なんです」
「そして、それを持つのは星の意思を継ぐもの…」
「星の遺志を継ぐもの…」
フェイトが繰り返すと、次元震が起きる。
「何だいつもよりひどい…それにこの感じまさか…」
レイヴンが空を見ると、空がだんだんと赤い何かに覆われて行く。
「ゼクス…こちらに来ていたのか…」
「えっゼクスって私達に協力してくれた、あの人？」
「多分、そうだと思います。だが奴の意識はもう…」
レイヴンが言うと氷の柱が、レイヴン達を襲う。
「クッ…やはり星の宿命から、逃れられなかったか…」
「お前も来い、レイヴン」
「霊守も、それを望んでいる」
「俺は自分の意思で戦う。それがたとえ間違えであろうとも、それがあいつとの約束だからだ」
レイヴンはデバイスを構える。
「行くぞ…マグナバレット」
「シュートモード…スタンバイ」
「あれがレイヴンのデバイス…ティアナと同じく、２丁拳銃か」
「いやあいつのデバイスの正式名称はマグナクロス。剣状態ならマグナザンブレード2丁拳銃ならマグナバレット盾ならマグナシールド槍ならマグナアルスピアと使い分けることが可能だ…」
ロイが言うと、レイヴンは戦っていく。
「全方位ロック、行けるか…」
「敵の予測進路割り出し中後、３０秒で割り出せます」
「なら行くぞ…マグナザンブレード」
レイヴンはデバイスの形体を変え、デュークへと斬りかかる。
「一騎当千、はあああああ」
「その程度の間合いで、俺はやれん！！」
デュークはレイヴンの斬撃を見切り、斬るがレイヴンは平然な顔で

フェイト達の方へと来る。
「その傷、平気なの？」
「俺は痛みを感じませんからね。それに…」
マグナクロスの姿を再び変える
「準備は出来ましたし…」
「フルシュートモード弾道設定完了。配置開始します」
レイヴンの周りに蒼い魔力弾数千個出現する
「凄い…でもこれだけの魔力弾。全て操れるの？」
「俺なら可能だ。だが奴らも、俺の動きはわかっている！？」
レイヴンが撃とうとすると、オレンジ色の魔力弾が大量に飛んでくる
「あの魔力弾のおかげで奴らに、隙ができた。行けるな」
「問題ありません。トリニティフォース、準備完了です」
「じゃあな二人とも、しばらく休んでいてくれ…」
レイヴンの放った魔力弾は全て二人に命中する。
「オートリカバリー開始します」
「ああ、頼む」
レイヴンはマグナクロスをもとのペンに戻し、胸ポケットに入れる。
「凄いね、そのデバイス」
「まあ高性能ですし、それでも一度使うとしばらくは使用できないんですよ」
レイヴンが言うと傷だらけのシグナム、スバル、ティアナが来る。
「どうしたの、シグナムその傷？」
「ゼクスにやられたんだな」
「えっ…どう言う事？」
レイヴンは自分達の事について話す。
「つまり君達は誰もが、星の断罪者となる宿命を持っている訳だね」
「ただし例外として俺、ロイトはないけどな」
レイヴンが言うと、血がこちら側にまで流れてくる。
「ようやく見つけたぞ。星の罪を持ち者レイヴン」
「ずいぶんと早いな…」

「私にこの程度の足止めなど意味はない」
「！！」
皆が驚くとエリオ、キャロ、シャマル、ザフィーラが血でできた結晶の中にいた。
「お前が用があるのは俺だけの筈だ」
「確かに私の目的は君だが…」
ゼクスはフェイトへと、血を伸ばす。
「しまった…クッ…」
レイヴンはデバイスをティアナへと投げ、フェイトの盾となる。
「レイヴン！！」
「お前達は行けあいつの元へ…俺が送る。必ず、この世界に平和を…ウッ…」
レイヴンは血に包まれながら、フェイト達の下に星の紋章を出す。
「みんなを導け、彼の元へ…」
「行かせる訳には、いかない！！」
ゼクスは全方位から、血を槍のようにして飛ばす。
「俺が援護する。急げ、そしてこの世界に真の平和を…」
「後は頼んだぜ…皆」
レイヴンとロイは血に包まれ、消える。それと同時に、フェイト達もある場所へと転移された。

第2話逃れられぬ宿命（後書き）

さまざまな犠牲の元フェイト達は遂に星降る谷へと来るだがそこで待っていたものとは…

次回第3話フェイト絶命

仲間を失いその瞳に映るものとは

第3話フェイト絶命（前書き）

人の命それは誰にとっても平等ではない

第3話フェイト絶命

「ここは…」
フェイト達が降り立った場所は、白い何もない場所だった。
「ここが、星降る谷？」
「どうやら、そのようだな…」
シグナムは傷口を押さえ、言う。
「あの人が命懸けで飛ばしてくれた、場所このどこかにスウェンさんが…」
スバルは果てしなく続く、白い空間を見つめる。
「ティア、そう言えば最後に受け取ってたよね」
「ええ、でも私じゃ使いこなせない。それよりこの空間、息がしづらいんですけど…」
確かにティアナの言うとおり、息はしづらかった。
「でもどうすれば…！？」
突然、皆を光が包み。次に目を開けると、水が流れ、流れ星が絶え間なくながれ続ける。世界へと来る。
「あっ…フェイトちゃん」
「なのは、それにはやて」
「あれ他の皆さんは？」
「それが…」
なのはに言われ皆、不安を隠せない。
「それじゃ、ヴィータ達は…」
「うん、私とはやてちゃんを救うために…」
「でも私は信じへん。コウ君やヴィータがあんな場所でくたばるはずがあらへん」
「そうだな、それに…皆、久しぶり」
目の前にスウェンが現れる。
「スウェンくん。無事だったんだね」

「まあ一応は…でも怪我の修復の為に、ここから出られなかったんだ」
「でもスウェンが無事で良かったよ」
「でも僕のせいでレイヴンやロイそれに罪のない人々まで…」
スウェンが涙を流すと、次元震が起き、星の断罪者が現れる。
「すべての元凶、スウェン・レイク。貴様を殺す！！」
「なのは達は早く、逃げて…奴らは、俺が相手をする！！」
スウェンは聖剣士の力を開放する。
「貴様の存在がこの世界の罪を作り出すならば死ね。スウェン・レイク」
「残念だが、お前らごときにやられる訳にはいかないんだ！！」
星の断罪者を次々と、倒していく。
「お前が最後だな…言え。後、何人いる」
「プロジェクトFの遺産の消去…」
「何…まさか…クッ」
スウェンは急いで、なのは達の元へと向かう。
「ハアハア…ここまで逃げれば、平気かな？」
「一応、魔力反応は感じないし、平気なんじゃないかな！？」
フェイトは突如、感じた魔力反応に驚く。
「ようやく見つけたぞ、プロジェクトFの遺産」
「ゼクス…」
フェイトはバルディッシュを強く、握る。
「ゼクスさん！？」
なのはが向かおうとすると、フェイトに止められる。
「今の彼は私達の知る彼じゃない。迂闊に近づけば死ぬよ！！」
「私とやるというのか…愚かな」
「みんなを守るためだ。もう一度だけ力を貸して！！」
フェイトの手元に、アルフォースが来る。
「行くよ…ゼクス」
「フフフ…手加減はしないぞ」

フェイトはアルフォースにバルディッシュを入れ込む。
「行くよアサルトミラージュ！！」
「こんな子供だまし、私に通用はしない」
フェイトの姿は消えるが、ゼクスは周りに血を出し絶対防御態勢になる。
「やるしかない…アクセルフォームモード解除」
「了解アクセルフォーム、移行します」
フェイトに鎧が装着される。
「行くよ、ゼクス…」
「そんな鎧を付けようと！？」
血のカーテンを超え、フェイトはゼクスに攻撃を加えて行く。
「はあああああああああ」
「グッ…まだだこの程度で」
ゼクスは血の剣を作り、フェイトへ斬りかかるが回避され逆に切られる。
「私が押されているのか…」
「これで最後です…」
アルフォースは外れ、バルディッシュが姿を現す。
「全ての力をこの一撃に…エターナルブレイズ！！」
「私の最後の足掻きだ。ジェノサイドシステム起動…」
ゼクスが地面に倒れると、同時に血柱がなのは達を襲う。
「なのはが危ない！！」
フェイトはなのはの代わりに血柱を受けるが、大したダメージは受けない。
「まだこの程度なら、支障はない…？」
突然、痛みが走る。
「そんな…フェイトちゃん！！」
なのはの声が聞こえるが、フェイトには何が起きたのかすらわからなかった。
「早く逃げて、フェイトちゃん！！」

「なのは…何があったの、私の身に！？」
フェイトが振り返ると、また痛みが走る。
「ガハッ…」
血を吐き、フェイトは自分の斬られた場所を確認すると血でべったりと服が赤くなっていた。
「フェイト、平気か？」
「スウェン…私、守れたよね」
「フェイト、もう喋るな…」
スウェンは涙を流し、言う。
「スウェン…何時も迷惑ばかりかけてごめん…」
「いいや、それは俺のほうさ。絶対にな」
「やっぱり優しいね…」
「フェイト…」
スウェンはフェイトの目を閉じ、冷たくなるフェイトをなのはに渡す。
「俺はいつもなんでこんなに…」
「スウェン君…」
「フェイトを頼んだ。なのは俺は…奴を倒す！！」
スウェンはクライスソウルを強く握り言う

第3話フェイト絶命（後書き）

フェイトの死そして聖剣士は怒りの心で戦う
次回第４話聖剣士最期の刻
聖剣士はその眼に何を見るのか…

第４話聖剣士最期の刻（前書き）

星の罪それは誰もが持つ宿命

第４話聖剣士最期の刻

「無狗、貴様は許さない！！」
「所詮はプロジェクトＦの遺産、消えようとも何の支障もない筈だ」
笑いながら言う。
「確かにフェイトはプロジェクトＦの遺産だ。でもなそれ以前に、俺たちの仲間だったんだ」
「あなたが本当に愛する者はこの世界にはいないというのに…」
「黙れ…」
「だが唯一、愛したといえばアリシア・テスタロッサだけですものね。霊守様に殺された」
無狗は笑いながら言う。まるでスウェンの意識を逆なでするように。
「そしてあなたが現れなければ、彼女達は普通の暮らしができたんですよ。アリシアだって死ぬ事はなく他の人たちも全員幸せな人生を歩めたのです」
「……」
スウェンは何も喋らず、無狗を見る。
「星の罪。あなたは生きている事、自体が罪なのです」
「そうだろうな…でも俺は…」
スウェンはなのはに抱かれている。フェイトを見る。
「人の命を簡単に壊す。貴様らは許せないな…」
「我々が目的もなしにただ破壊活動を続けてる、そう言いたいのですか」
「そうじゃない…人はいつか死ぬさ、それにフェイトは本来は生まれてはならない人間だった。でもなその事も全て含めてフェイトはフェイトなんだ。アリシアとは違うな…」
スウェンが涙を流すと、無狗は笑う。
「それと面白い事を言おう。君の世界を滅ぼしたのは、霊守様だよ」
「つまり霊守が俺の仲間達を…」

「そして唯一、生き残りミッドチルダで裕福に暮らしていた」
「そしてその親も霊守に殺されたんだ」
スウェンが言うと、痛みが走る。
「グッ…なんだこの痛みどこにも魔力反応なんて感じなかった」
「残念だったな、お前はここで終わりだ」
「嘘だろ…なんだよこれ…」
スウェンは自分自身に起きている事に驚きながら、なのは達をミッドチルダへと向かわせる。
「確かにもう助からないかもな…」
「何を…する気だ」
スウェンは自分の体内へと腕を入れ、聖剣士の力を抜きだす。
「俺にはもう必要のないものだ」
聖剣士の力を握りつぶす。
「じゃあな、無狗お前も安らかに眠れ…」
「何だと…」
スウェンは消え、無狗は息を引き取る。

第４話聖剣士最期の刻（後書き）

数々の仲間を失い彼女たちはそれでも平和の為に戦い続ける
次回第５話星の罪
全てを失いそれでも人は生き続ける

第5話星の罪（前書き）

人は生き続ける限り何かの使命を持つ

第5話星の罪

なのは達がミッドチルダに飛ばされると、もはやそこは前までのような美しい場所ではなく血の臭いと火薬のにおいそれに機械の機動音が不気味に聞こえる街になっていた。
「どう言う事これ…」
「なのはさん…あれ…」
スバルが震えながら指を指す方向を見ると、ゼロとロイトが戦っていた。
「何があったんだ、ゼロ!?」
ゼロは何もしゃべらず、ロイトを斬って行く。
「私、助けに行きます!!」
スバルはウイングロードを出し、ゼロとロイトの元へ向かう。
「ちょっと待って…スバル」
なのはが止めようとすると、後ろに殺気を感じる。
「はっ…セイ…」
「何を勘違いしているのですか、私は星の秩序を守る者」
「何を言ってるの、セイ?」
「あなたこそ何を言っているんですか?」
星の秩序を守る者はなのはに銃を向ける。
「まさか…あなたがこの世界の人たちを…」
「この世界の人間が何人死のうと私達には関係はありません。それにどうせ滅ぶ運命なんですから」
引き金を引こうとすると、何者かに止められる。
「まだ抗いますか。雷光の襲撃者」
「僕はこの世界を守る。それが約束だからだ、セイ、君も戻るんだぞ」
「これが本来の私です。あなたこそ…クッ…まだいましたか」
星の秩序を守る者に握られていた。銃をヤミは撃ち落とす。

「次は心臓を狙うぞ…」
「クッ…どうやら今のままでは退く以外の道は残されていないようですね」
「待って…セイ」
なのははは止めるが、星の秩序を守る者は消える。
「なのはちゃん…」
「平気だよ、それよりロイト君の方を…！！」
皆が見るとスバルを庇い、ロイトはゼロに刺されていた。
「平気…スバル？」
「そんな、なんで私なんか」
「僕にもわからないでも、これで良かったんだと思う…」
ロイトは最期に笑顔を見せ、息を引き取る。それと同時にスバルの腕に新たな、デバイスが握られる。
「うおおおおおおおおお」
「何だ、この力！？」
ゼロは訳も分からないまま、吹き飛ばされる。
「これが彼が残した、最後の力。行けえええ」
スバルは周りに落ちている。色々な人の魔力をすべて集め、一点に集中させ放つ。
「スターライトブレイカー」
「ここまでか…」
ゼロは消え、スバルも倒れる。
「平気、スバル？」
ティアナはスバルへと駆けつける。
「ティア…なんか体がうまく動かない…」
「あれだけの魔法を使ったんだもの、反動が来たんでしょ」
だがスバルの目にはティアナの目に涙が、溜まっているように見えた。
「ありがとうね…ティア」
「何に対してのお礼？」

「今までありがとう、ティア。私、迷惑ばかりかけたけどティアと一緒に戦えてよかった…」
「何言ってんのよ。スバル、あなたと私はいつまでも一緒よ…」
ティアナは涙を流すが、スバルは笑顔を見せ、ティアナの腕から光となり消える。
「ティアナ…」
「平気ですよ、なのはさん。こんなことでくよくよしていたらスバルに笑われます」
ティアナは涙が止まらない、顔で無理やり笑顔をつくる。
「それに…スバルが望むのはこの次元世界の平和だと思いますし、こんな場所じゃまだ立ち止まれませんから」
「その意思があれば平気だね。行こう…この暗い世界を照らす本当の星となる為に…」
なのはは空を見上げ言う

第5話星の罪（後書き）

数々の思い出が残る世界を後にし彼女達は黒い世界地球へと向かう
次回第6話星の導きそして…世界の終焉へ
全てを失いそれでも彼女はまだ世界を照らす星となる為に戦う

第6話星の導き…そして世界の終焉へ（前書き）

人が生きるために必要なものそれを取り戻す為に…

第6話星の導き…そして世界の終焉へ

「ここが…地球？」
なのは達は驚く、まるで常に夜みたいに暗かった。
「なのはちゃん…駄目や、生命反応はないで」
「そうなんだ…でも違う、場所なら…」
なのはが言いかけると、何かが降りてくる。
「あなたは…霊守、そんなあの戦いで死んだ筈？」
「でも私は現にこうして、ここにいます！？」
霊守は何かを感じ取り、避けるとスウェンが来る。
「ハアハア…ようやく見つけた…霊守！！」
「聖剣士の力を抜いたというのに、まだ戦うのですか？」
「それが今の俺に出来る、精一杯の事だからな」
スウェンが言うと、周りを囲まれる。
「ですがもうあなた達ではどうする事も出来ません。それに現にもう次元世界はこの世界を残し、消滅しました」
「そんな…ミッドチルダが…」
「それにエルガストや星降る世界もか」
はやて達が驚くと、だんだんと体の感覚が消えて行く。
「何や、これ…暗闇…止めるんやあああああ」
「はやてちゃん、ティアナ！！」
「私は…もう…うわあああああああ」
ティアナとはやては消える
「霊守、彼女達に何をした！！」
「彼女達が望んだ事です。私はただ手を差し、伸べただけ…」
「貴様あああああ」
スウェンはクライスソウルを構え、霊守を斬るが当たらずにただ空を切る。
「ハアハア…クッ…」

「あなたももういいですよ…休みなさい」
「お前にやられる訳にはいかない…うおおおおおおおお」
スウェンは地球を覆う、暗闇を吹き飛ばす。
「何…貴様のどこにこれだけの力が…あるというのだ?」
霊守は驚きながら、スウェンを見る
「やはりあなたは素晴らしいでもそれ以外は消えてもらいます」
「えっ…!?」
なのは、ライ、ヤミ、シグナムを何かが包みこんでいく。
「何だ、これ…僕の罪…」
「私は…何故…」
「主…私は…」
3人は消えるが、なのはを包み込んでいる闇をスウェンははがそうとする。
「これ以上…大切なものを奪われてたまるかあああああああ」
どんどんと闇は広がり、なのはの姿が見えてくる。
「スウェン君…」
「なのは、手を伸ばせ…」
「うん…」
なのはは手を伸ばし、スウェンに助けられる。
「何故だ…何故、自分達の運命を受け入れられない」
「俺が生き続ける事、自体が罪なのはわかってるだからと言って何もしないで死ぬのは無理だ」
「だがお前達が生き残ろうと死んだ者は帰ってこない。それに…」
「だが誰にも人の命を奪う権利なんてない。それに…誰も必ず一度は疑うでも人は必ず分かり合える何年かかろうともな…」
スウェンが言うと、霊守の目から涙がこぼれる。
「そして俺はお前とも歩んで行けると、思ってる…」
「私と貴様らがか。そんな夢物語ありはしない、それに人は疑い殺し合う。それが定めの筈だ」
「違うよ、確かに何度もぶつかりあうけど、いつかは分かり合える。

私達は全員その力を持っているんだ」
「そしてそれは人を愛する事…それが俺たちの力だ！！」
スウェンが言うと、痛みが走る
「だがもう遅い。世界は終焉へと動き出した人は滅ぶのさ」
霊守は消える
「なのは…奴を追え…俺も後で必ず行く」
「わかったよ…この長く続く戦いに、終止符を打ってくるよ」
なのはは向かう

第6話星の導き…そして世界の終焉へ（後書き）

全ての思いを胸に今彼女は決戦の地へ…
次回第7話人が人と歩むために
彼女は最後の力を賭け世界の命運を決める

第7話人が人と歩むために（前書き）

人の希望…それは…

第7話人が人と歩むために

「何故、私は涙を流しているのだ…」
霊守は頬を伝い、地面へと落ちる。涙を見ながら言う。
「ようやく…辿り着いた」
なのはは傷だらけになりながらも、霊守にスターフォースを向ける。
「何故、そこまで他人の為に戦える？」
「私に力があるから…それに後悔したくないから！！」
なのはの甲に、星の紋章が現れる。
「あなたは…愛する、人はいますか？」
「いきなり、何を言っているんだ？」
「人は誰かを守りたい、一緒にいたいと思う時、無限の力が出せるんだ」
「それがあなた達の強さですか…」
霊守からは闘争心は感じない。
「ねえ霊守さん…お願いがあるんだ…」
「私は何のために生きてる」
「私はあなたと…友達になりたいんだ」
霊守は驚く。
「私は貴様の仲間を何人も殺したんだぞ。それなのに…」
「そんな事、関係ないよ。これが今の私の想い受け取ってくれるかな？」
「何故、そう平然といられる」
「あなたが自分の生きる意味を求める限り、私はあなたと…！？」
なのはの背中に突然、痛みが走る。
「なのは…」
スウェンはなのはを後ろから撃った。星の断罪者を倒し、なのはの元へと向かう。
「平気か…なのは」

「スウェン君…私」
「もう喋らなくていい…」
「これが人の死というものか」
霊守は、なのはを見ながら言う。
「そうだ。俺やお前みたいに永遠の命なんて人間にはないんだ」
「ならば何の為に生きているんだ？」
「次の世代に自分の想いを託すため…そして大切な人と限りある時間を歩むためだ」
スウェンはなのはの目を閉じ、言う。
「俺たちみたく歪んだ、人間にはわからない人の素晴らしさなんだ」
「私達が歪んでいる？」
「人の命は限りあるものだ、だからこそいいのかもな」
「それが貴様が学んだ事か」
霊守に言われ、スウェンは頷く。
「俺は今からでも、本当の人間に戻りたいと思った」
スウェンは涙を流しながら、言う。
「大切な人と限りある時間を一緒に過ごしたいと思った…」
「だがもうその願いも、叶わないさ…」
「でも俺は…彼女達の笑顔をこの世界に蘇らせたい！！」
スウェンが言うと、自然が蘇る。
「何が起きている」
「星の輝きは誰の胸にでもあるものだ…」
スウェンが言うと後ろに今までスウェンが出会った、人々が現れる。
「そして想いはいつか、本当の力に変わる…」
「だが、死んだ者は蘇りはしない」
「俺たち二人の命と引き換えならばできない事はない筈だ。この世界を元に戻し、人々を蘇らせるのもな…」
スウェンが手を差し出すと、霊守はそれにひかれるように手を伸ばす。
「だが完全な、賭けだぞ」

「お前と俺ならやれるさ、なっ！！」
スウェンが言うと、霊守は顔を赤くする。
「これが恋というものか…」
「中々、いいもんだろう」
「ああ、私もみたくなった。この世界の行く末を…」
「それじゃ始めるぞ…」
スウェンはクライスソウルを放り投げ、霊守の唇にキスをする。
「我らが命と引き換えに、この次元世界を蘇らせてくれ」
二人が言うと二人は光となり消えて行く。
「これが死というものか…」
「平気さ、霊守、俺たちの意思は必ず受け継がれる。この彼女達にな…」
「私も、もう少し早く、わかればよかったのかもしれないな」
「これから始めればいいじゃねえか。全ての人は必ず、間違うんだからな」
スウェンと霊守はとうとう消えて世界を光が包む

第7話人が人と歩むために（後書き）

二人が生きた証は受け継がれるのか
次回最終話魔法の呪文
二人の想いは誰の胸にも…

最終話魔法の呪文（前書き）

人と人を繋ぐその言葉も魔法

最終話魔法の呪文

二人が消えると、世界を七色の光が包む。それから1年後ミッドチルダ。
「フェイトちゃん～～」
「どうしたの、なのは？」
フェイトが聞くと、ヴィヴィオも来る。
「今日一日だけ、ヴィヴィオの世話、お願いできないかな？」
「別にいいけど…何かあるの？」
「うん…まあ、色々とね…」
なのはは顔を赤くしながら、走って行く。
「なのはママ、今日はデートなんだよ～～」
「そうなんだ…ヴィヴィオ、ちょっとついて来てくれるかな」
「フェイトママのお仕事？」
「いつもの日課かな」
フェイトは笑いながら、ヴィヴィオに言い、お花屋さんに寄る。
「あの～すいません」
「あれ…フェイトさん。今日も来てくれたんですか」
「ロイトとリルも、元気そうだね」
「はい。一応、店も繁盛してますし、何より皆さん。優しいですからね」
フェイトとロイトは話し合う。
「いつものあれあるかな？」
「あれですか…ちょっと待っててください」
ロイトは店の奥へと、入って行く。
「ねえ、リル、いつものあれどこだっけ？」
「それならあそこにあるよ」
リルは持ってくる。
「また来てくれたの、フェイト執務官」

「うん。それじゃ、渡してくるね」
ロイトは店の奥から、出てくる。
「これでいいんですよね…」
「うん。ありがとう、それじゃこれ…」
フェイトはお金を置き、ヴィヴィオと共に出て行く。
「この後は、どこか行くの？」
「うん。一応、日課だし」
フェイトが歩いて行くと、海の見える丘へと来る。
「ここはどこ、フェイトママ？」
「もう少し進めばわかるよ…」
「？」
ヴィヴィオはフェイトの目から涙が出ているように見えた。
「着いたよ…ヴィヴィオ」
フェイトは言うが、ヴィヴィオの目の前には、一つのお墓しか見えなかった。
「名前を見て…」
「うん、わかった」
ヴィヴィオが名前を見ると、スウェン・レイクと書かれていた。
「えっ…スウェンパパのお墓？」
ヴィヴィオは驚く。
「そっか…ヴィヴィオは知らなかったんだっけ」
「スウェンパパ、死んでたの？」
ヴィヴィオの目には涙が溢れていた。
「だって…スウェンパパは遠くの世界に行っているだけだって、なのはママは言ってたよ」
「確かに彼は遠い世界に行った。私たちじゃ手の届かないような、場所にね…」
フェイトはスウェンの墓の前に花を置き、手を合わせる。ヴィヴィオもそれをまねる様に手を合わせる。
「それじゃ、戻ろうか…ヴィヴィオ…」

フェイトが手を持つが、ヴィヴィオは離れない。
「スウェンパパ、本当にもう会えないの…」
「ヴィヴィオ、スウェンは今まで頑張ったんだ。だからもう休ませてあげなくちゃ…」
フェイトは言うが、ヴィヴィオは離れようとはしない。
「スウェンパパは約束してくれたんだ。いつか世界が平和になったら、ずっと一緒にいてくれるって…」
ヴィヴィオの目には涙が溢れる。
「これ以上、ここにいたらスウェンが安心して眠れないよ」
フェイトはヴィヴィオの肩を叩く。
「フェイトママ…泣いてるの？」
「私だって悲しいよ。でもそれでも彼が愛したこの世界を平和にするために生きて行くんだ…」
「フェイトママはそれでいいの？」
「会いたくないといえば、嘘になるけど…彼の生きた証はまだこの胸で生きてるから…」
フェイトは空を見ながら言う。
「それじゃ戻ろうかヴィヴィオ」
「うん！！」
フェイトとヴィヴィオは色々な事を話しながら戻って行く。

最終話魔法の呪文（後書き）

次回からはちょくちょく番外編を書いていきます一応はこれで完結です

番外編1話彼のいない世界（前書き）

番外編1話です本編から3年後ぐらいですかね

番外編1話彼のいない世界

第1管理世界ミッドチルダ。
「フェイトちゃん、おはよう～～」
「おはよう。なのは…ユーノとの新婚生活はどう？」
「久しぶりに会って、言うセリフがそれなの～～～」
「えっだってそれ以外に聞くことなんて、ないし」
フェイトが言うと、スバルとティアナそれにレイヴンが来る。
「あっ…なのはさん。帰ってきたんですか」
「スバル。私が留守の間もちゃんと、仕事してた？」
「それが酷いんですよ～ティアとレイヴンさんがいつも見張ってて、私、息が止まりそうでした～～」
「それはスバル。お前が抜けだそうとしたから、だろ…」
レイヴンが言うと、スバルは汗をかく。
「そうよ。全く、スバルったら」
「そう言うティアナだって最近、私に仕事を押し付けてるよね…」
「えっ…と…それは」
ティアナも汗をかく。
「ともかくありがとうね。レイヴンくん」
「いえ…仕事ですから…」
レイヴンは時空管理局内へ入る。
「あまり迷惑かけちゃだめだよ。二人とも」
「そうだよ…それにティアナ、用があるならあるでちゃんと言ってくれないかな？」
「わかりました。以後、気をつけます」
二人は言い、時空管理局へと入って行く。
「そう言えば、フェイトちゃん。知ってる？」
「ティアナとレイヴンの関係、それぐらいはわかるよ」
「いやそうじゃなくて…スウェン君が生きているって噂」

「それ…本当？」
フェイトはなのはを揺らす。
「本当か嘘かは分からないけど…ね」
「でももしそれが本当なら、なんで帰ってこないの？」
「向こうにもいろいろと事情があるんじゃないのかな」
「でも連絡ぐらいくれても…」
フェイトとなのはが話してると、後ろからクロノが来る。
「二人とも急がないと、遅刻するぞ…」
「えっ…」
「聞いていなかったのか。今日は正式に、はやての部隊の発表がある筈だぞ」
クロノに言われ、二人は急いで向かう。
「さて、俺も急ぐか…」
クロノも時空管理局へと急ぐ。

番外編1話彼のいない世界（後書き）

本編の続きです正確にいえば番外編で本当の終わりです次回ははやての新部隊が結成そして…

番外編2話新部隊（前書き）

新部隊の結成ですそれと同時にある魔導師の話です

番外編2話新部隊

「それでは新部隊、部隊長八神はやてよりお言葉をいただきます」
紹介され、はやては前に出る。
「この度、新部隊、蒼穹を指揮することになった。八神はやてです。よろしくお願いします」
はやてが自己紹介をすると、拍手が沸き起こり、はやては下へと降りる。
「ふう～緊張したわ～～」
「でもメンバーは誰なの？」
「それになんで今頃、新部隊を結成させるの？」
はやては話す。
「ゼクスさんやカリムの話ならまた何かがこのミッドチルダに迫っているんや」
はやてが言うと、地震が起きる。
「何や、この地震？」
「次元震とは違う。誰かが起こしてるの？」
外を見ると、3人の魔導師が立っていた。
「何、あの魔導師？」
「ただ危険な感じがする」
フェイトが言うと、時空管理局に氷の刃が刺さる。
「君達では僕達には勝てない。それに…邪魔はしない方がいい。命が惜しければね。行くぞ…ガル、バン」
二人は頷き、ついて行く。
「何なのあれ…」
皆は驚く。その頃、第3管理世界ヴァイゼン
「……」
布で姿を隠した男は、店でパンを買い出ていく。
「また来たのかい」

「なんか最近よく来るんだよ」
店主が話してると、男がおつりを忘れているのに気付き、届けに行く。
「お客さん、忘れ物…」
店主の声に気付き、男が振り返ると氷の刃が男に迫る。
「ようやく見つけた。やっぱり生きていたか…」
「……」
男は店主からおつりを受け取り、歩いて行く。
「無視か…僕が弱いとでも、言いたいのか!?」
斬りかかると、素手で止められ、睨みつけられる。
「……」
「今回は小手調べだ。だがお前は既に命を狙われてる。その事だけ覚えておくんだな」
撤退すると、男は店主を届け、再びパンを購入する。
「あんた、一体、何者なんだい?」
「俺に関わらない方がいい。幸せな生活を送りたければな…」
男はパンを食べながら言う。
「あんた、何で命を狙われているんだい?」
「……」
男はお金を置き、店を出ていく。店主はその寂しい後ろ姿を見ていた。

番外編2話新部隊（後書き）

新たな敵の出現そして時空管理局の新部隊その名を蒼穹
次回3話狙われたヴァイゼン
敵の目的それは…

番外編3話狙われたヴァイゼン（前書き）

新部隊蒼穹初任務

番外編3話狙われたヴァイゼン

「ウル、おぬしともあろうものが不覚を取るとはな」
「うるさいぞ、バン。それより奴は？」
「一応、ガルが追跡はしている」
「ちっなんでよりによって奴なんだ。お前が行けば良かっただろう」
ウルが言うと、バンは出ていく。
「ガル、聞こえるか…」
「どうした、バン？」
「そろそろ作戦開始しようと思ってな」
「そうかそれじゃ、まずは人々の血が必要だな。俺の血が騒ぐぜ！！」
ガルの言葉を聞き、バンも準備を開始する。その頃、第1管理世界ミッドチルダ。新部隊結成と同時に任務が来る。
「蒼穹のうちなのはちゃんの部隊つまりスターズは待機。今回はライトニングに行ってもらうで」
「それはいいけどはやて誰がライトニングなのか分からないんだけど」
フェイトに言われ、はやては紙を出し、チーム分けをしていく。
「スターズはなのはちゃん、スバル、ティアナ、ヴィータ、レイヴン君、ゼクスさんライトニングはフェイトちゃん、エリオ、キャロ、ロイト君、ゼロ君、シグナムや」
「この部隊編成でいいの？」
「まず問題ないやろ。それに能力も五分五分やしな」
はやてが言うと、被害報告が来てフェイト達はヴァイゼンへと向かう。その頃、第3管理世界ヴァイゼン。一人の魔導師の力により被害は最小限に抑えられていた。
「……」
「てめえ、黙ってねえで何か言えよ」

ガルは血の付いている爪を向けながら言うと、魔導師の姿が目の前から消え、後ろに凄い衝撃が来て吹き飛ぶ。
「てめえ八つ裂きにしてやる！！」
ガルは自分の魔力をデバイスの爪に集中させる。
「これを食らっても、立てられるか…」
魔導師は避けようとするが、避けられずに切り裂かれ血を出す。
「何故…避けない！？」
ガルが驚くと、魔導師の後ろから鳥が飛び立つ。
「まさか…そんな小動物の為に、わが身を犠牲にしたのか」
「……」
魔導師は血が出ている場所を治癒し、デバイスを握ると同時にガルの周りに魔力で作った剣が浮く。
「なんだ、この剣？こんなもので俺を仕留める気か」
ガルは自分の体を回転させ剣を落としていくと、目の前に魔導師が現れ魔法を放とうとするが突然、起きた。地割れに驚き距離を離す。
「ずいぶんと遅いな、バン」
「そう言うおぬしも結構危険な状態だったんじゃないか？」
「それに邪魔者を連れてきやがって」
「それは…済まぬ」
バンが謝ると、高速で移動する。２つの雷がガルを襲う。
「俺と高速戦闘か…後悔するぜ！！」
「……」
魔導師もその高速戦闘の中へと入る。
「ちっ…結構速いな、だが甘い！！」
「クッ…捉えられた？」
フェイトはさらにスピードを上げるが、ガルはそれよりさらに速いスピードで切り裂いて行くがフェイトに傷はなかった。
「……」
「てめえ…やっぱり、そいつらの仲間か」
ガルは腕を押さえながら言う。

「ガル、おぬしともあろうものが…後はわしがやる。下がっておれ！！」

バンは言うのと同時に地割れを起こす。それに反応できずフェイトは落ちるが魔導師に助けられる。

「……」

「ありがとうございます…」

フェイトがお礼をすると魔導師はバンのほうを見る。

「作戦は失敗じゃな、退くぞ…ガル」

「わかった…」

ガルとバンは撤退すると同時にフェイト達を助けてくれた魔導師も消える。

「何か凄い懐かしい感じがした。それにあの安心感…もしかして」

フェイトはずっと魔導師が消えた方を見つめていた。

番外編3話狙われたヴァイゼン（後書き）

ミッドチルダへと帰還するフェイト達だがそこで見た者とは…
次回４話帰ってきた魔導師
新たな力を手に入れ大切なものを守るため戦う決意をする

番外編４話帰ってきた魔導師（前書き）

全ての過去を捨て今堂々参戦

番外編4話帰ってきた魔導師

第1管理世界ミッドチルダ
「君の方から私に会いに来るとはな…」
「時間がない。預けていたものを全て返してくれるか？」
「とうとう決意したのか」
「俺は存在自体が間違いでも俺は生きると決めた。だから再びこの力を使う事だって躊躇はしない」
魔導師が言うと、スカルエッティは笑いながら託す。
「だが今度は勝手に死なないでくれよ」
「俺の体を調べたいなら調べればいい。あなたは俺にとっては親みたいなもんだからな」
「なら何故、あのとき反抗したんだ？」
「俺にはあなたが間違っていると思えた。だが時空管理局が正しいとも思えず俺のたどり着いた答えが彼女たちだったんだ」
スカルエッティは魔導師に何かを渡す。
「これは…」
「君の力を何倍にも上げるシステムだ。高町なのはのをもとに造ってある」
「だがなぜこれを俺に…？」
「今の君の力ではやがて限界が来る。人間だからな…」
スカルエッティが言うと、魔導師は布を取りスカルエッティに渡す。
「もう行くのか…」
「俺ももうこれ以上、隠れる理由はないからな」
ターバンを取り、素顔を見せる。
「だが本当にいいのか、その眼の傷」
「これは俺が人間に戻った証みたいなものだ」
「そうか…聖剣士と決別したんだったな」
「俺はようやくわかった人としての幸せをだから名前だけは受け継

ぐ、スウェンとしてな！！」
スウェンはスカルエッティより託されたスターシステムをクライスソウルに入れる。
「スカルエッティ一つだけ聞きたい事がある」
「何だ…」
「フェイトと戦った時、本当はどう思ったんだ？」
スカルエッティは黙りこむ。
「本当のあなたは優しいんだ。俺を救ってくれたみたいに…」
「だが私は犯罪者だ。それも超がつくほどのな」
「でも俺はあなたの優しさを知っている。だからこうして話す事ができます」
スウェンが言うと、クライスソウルから警報が来る。
「推定魔導師ランクオーバーSクラス3人接近」
「それじゃ…俺はもう行きます。ここを戦場にはしたくないから」
スウェンは転移魔法を使い消える。
「彼には何か特別な力でもあるのか…人を惹きつける何か特別な力が…」
スカルエッティが言うと何者かが来る。
「クロノ提督ですか…」
「スカルエッティ…スウェンは？」
「行きましたよ。自分が最も愛する者たちのところへね」
「そうか…ならついて来てくれ…」
クロノの後をスカルエッティは付いて行く。その頃、スターズ部隊
「ハアハア…クッ」
なのははレイジングハートを杖代わりにしながら立っていた。
「どうしたこの程度か？」
ウルは自身のデバイス【エグゼクター】をなのはに向ける。
「援護は…！？」
なのはが後ろを見ると既に魔力が底をつき、スバル達は倒れていた。
「お仲間なら既にリタイアだぜ。あんたもそろそろ終わりししてや

る！？」
ウルが魔法を放とうとすると突如、光の剣が落ちてきてウルの魔法を遮る。
「クッ…まだ邪魔ものが居やがるか…」
ウルは腕を押さえながら他の仲間を見ると既に倒されていた。
「なっ…バンにガルが一瞬で…！？」
突如後ろに殺気を感じ、ウルは捕まる。
「貴様、やはり奴らの仲間か」
「早く退け。俺は命を奪うつもりはない、だがまだ抵抗するなら…」
バンとガルの心臓部分に徐々に迫る。
「今度会った時が貴様の最期だ」
ウル、バン、ガルは撤退して行く。
「平気か…なのは」
「うん…何とか少し血が出てるけどこれぐらいなら平気だよ」
「スバルやティアナ達も魔法を使いすぎただけだ。命に別状はない」
スウェンの言葉になのはは安心する。
「でもなんで無事なのに連絡をくれなかったの？」
「俺はあの後、時空管理局に捕まり、色々と検査され最終的には留置所に送られたんだ」
「でもそれじゃなんで留置所から出てるのまさか…脱獄？」
「まあその手もあったんだが…ユーノやクロノそれにスカルエッティの力で出してもらったんだ」
スウェンが話しているとユーノが来る。
「スウェン、ようやく戻ったんだね」
「済まないなユーノ、迷惑ばかりかけて」
「平気さ、僕の知識も役に立つならそれでさ」
「そう言えばヴァイゼンにいる時、聞いたんだが二人は婚約したんだろ？」
ユーノとなのはの顔が急激に赤くなる。
「あっ…悪い別に悪気があった訳じゃなかったんだ」

「いや別に気にしてないけどそう言えばヴァイゼンにいたんだよね」
「ああ、そうだけど何かあるのか？」
「いやただなんでミッドチルダじゃなく、ヴァイゼンにいたのかな～と思ってね」
なのは、ユーノ、スウェンが話してるとなのはに通信が入る。
「なのはちゃん聞こえるか～～」
「どうしたのはやてちゃん？」
「任務を終えたライトニングが帰ってきたんや。早くお祝いしたいから戻ってきて～～」
「わかったよ。とっておきのプレゼントを持っていくよ～～」
なのはは通信を切り、スウェンを見る。
「なのはもしかしてとっておきのプレゼントって…俺か？」
「あれ、わかったんだ。それじゃ急ごうよ」
「いや俺には検査があるし…それに今あうのは危険な気が…！？」
突然起き上ったスバルに腕を持たれ、スウェンは抵抗もできず連れてかれる。
「にゃははは～～」
「スウェンらしいかな？」
ユーノとなのははその光景を見て後からついて行った。

番外編４話帰ってきた魔導師（後書き）

ようやくみんな揃い飲み会が始まる
次回５話新部隊結成祝い
次回はバトルはありません

番外編5話新部隊結成祝い（前書き）

少しずつ戻る平和な毎日

番外編5話新部隊結成祝い

皆で合流し、新部隊結成祝いが始まった。
「スウェンはお酒飲めないんだっけ」
「俺は水で平気だ。全員が酔っても困るだろう」
スウェンは水を飲みながらザフィーラやユーノと話す。
「でもごめん。スウェンなのはを取って…」
「なのはが認めたんだろう。なら俺に謝る必要はないじゃないか」
「でも何か罪悪感が残るし…」
「俺はともかく気にしてない。それよりここ最近の事件のデータを見せてくれ」
スウェンに言われユーノは見せる。
「成程、結構色々あったんだな」
スウェンは感心しながらどんどん見ていく。
「色々あったんだな～～」
「スウェン…本当は何をしに戻ってきたの？」
「皆の笑顔を守るためかな…」
スウェンの前ではもうお酒を飲んで酔っているなのは達がいた。
「スウェン君も飲みなよ～～～」
「止めろ。なのは、覚えてるだろ…」
スウェンは何とか逃げだそうとするがお酒を無理やり飲まされる。
「ウグッ！？不味い…」
スウェンはダッシュで外に出る。
「ハアハア…危なかった。なんであんなもの飲むんだ、俺にはわからん」
スウェンが戻ろうとするとフェイトが来る。
「どうしたんだフェイト」
「スウェンにまだ挨拶してなかったから…」
「そんな事、後でもいいのにどうして今何だ？」

スウェンが聞くとフェイトはスウェンを見る。
「お願いがあるんだ、スウェン」
「どうしたんだよ急に…」
「また私と付き合ってくれないかな？」
「えっ…クロノに聞いたらフェイトはお見合いしたって言ってたけど…」
スウェンが言うとフェイトは笑う。
「平気だよ全部断ったからそれにスウェンが生きてると信じていたから」
「それは嬉しいけど俺はもう聖剣士じゃないんだ。フェイトの身だって守れない」
「平気だよ。自分の身は自分で守るからだから…」
フェイトが手を出すとスウェンは握る。
「またよろしくなフェイト…」
「うん。今度こそ私がスウェンを守るよ」
スウェンはその後フェイトと話し自宅へと帰った。

番外編5話新部隊結成祝い（後書き）

楽しい日々は本当にかけがえのない思い出になる
次回6話戻る日常
人は大切な人といる時一番優しくなれる

番外編6話戻る日常（前書き）

人が一番安心していられる場所それを守るために…

番外編6話戻る日常

？？？

「ハアハア…何だあの化け物…」

一人の魔導師は出血している腕を押さえ、通信を送る。

「聞こえますか…時空管理局、現在こちらは正体不明の怪物と戦闘中、繰り返します。正体不明の怪物と交戦中至急、援護を…」

「どうしますか、クロノ提督？」

「今こちらの戦力をいたずらに送る事は出来ない残念だが…」

クロノが下を向くと最後に聞こえたのは、魔導師の断末魔だった。

「いったんミッドチルダへ戻る。進路を取れ」

「了解です。ミッドチルダへと進路を取ります」

クラウディアは方向転換をし、ミッドチルダへと向かう。

「俺は少し向こうに着くまでにやらなければならない事がある。後は任せるぞ。レッカ」

「了解です。何かあったらすぐ呼びます」

「頼む…」

クロノは艦橋を出て自分の部屋へと行く。

「このまま何事もなければいいがな…それよりデータをまとめるか…！？」

突然、痛みが来てクロノは血を吐く。

「何故、クラウディア内に…」

クロノが振り返るとレッカが来た。

「平気ですか。クロノ提督！！」

「ああ、何とか平気だ。それより異変はないか？」

「今のところはありません。それよりその傷、誰に？」

「心配はない。後の事を任せて平気か？」

クロノに聞かれレッカは頷く。その頃、第1管理世界ミッドチルダ

「スウェン～～」

「急に呼び出してどうかしたのか。フェイト？」
「何か急に今回あった筈の仕事がキャンセルになったから、スウェンに会いたいなと思って…」
「そうなのかでもおかしいな。今回の仕事確か長期だったんだろ。それがいきなりキャンセルか…」
スウェンは不審に思う。
「そう言えばスウェンもあったんだよね」
「ああ、でもこっちも突然のキャンセルだけどな」
「確か護衛任務だっけ」
フェイトに言われるとスウェンの携帯電話が鳴る。
「どうかしたのか、なのは？」
「スウェン君今すぐ来てくれないかな。海鳴市で待ってる」
「ああ、わかった」
スウェンは携帯を切り、フェイトに理由を話し海鳴市へと向かう。
「どこだ、なのは…来たぞ！？」
突然、肩に痛みが走り血が出てスウェンは周りを見ると囲まれていた。
「やはり…罠か…」
スウェンはＢＪを着てクライスソウルを戦闘態勢にする。
「使ってみるか…クライスソウル…スターシステム起動」
「了解。全システム解除開始…」
「ぐうううううう」
スウェンの体を激痛が襲う。
「まだか…クライス」
「後２０％です」
「まだこの痛みに耐えろってか…」
スウェンが話してると色々な方向から魔力砲が来る。
「行けます…スターシステム起動シグナル確認」
「行くか…はあああああ」
スウェンの周りを星が包み魔力砲を反射させどんどん相殺させてい

く。
「損傷は…」
「スターバリア小破…まだ行けます」
「なら反撃だ、行けるな。クライス…」
「了解…スターシステム０２起動」
再びスウェンを先ほどより強い激痛が襲う。
「この激痛、何とかならねえのか」
「この激痛には慣れてもらうしかありません」
「ずいぶん酷いな。クライス」
スウェンが話してるとさらに星の数が増える
「０２システム解除完了。何時でもいけますよ」
「敵は何体だ…」
「おそらくは…１７機ぐらいかと…」
クライスに言われスウェンは浮かぶ星を見る。
「すべてを一撃で落とすことは可能か」
「あなたの技量があれば…」
「なら行くぞ…」
「了解バーストモード移行します」
クライスソウルが本来の剣状態からでかい銃へと変わる。
「これで…最後だ！！」
スウェンが引き金を引くと白い魔力砲が全てを飲み込み、敵の反応は消滅する。
「元のソードモードに移行しますと同時にスターシステム、プロテクトロック」
「ようやく終わりか！？」
スウェンは突然、血を吐くがすぐに痛みは和らぐ。
「ハアハア…これが反動か、今の俺じゃ０３以降は耐えきれねえな」
「仕方ありません。これは本来、聖剣士の力を失っていないあなた用の新装備ですから」
「はっきりと言うな、クライス」

「でも私はあなたなら使いこなせると信じています。聖剣士の力などなくてもね」
クライスが言うとスウェンは空を見る
「さて戻るか…」
スウェンはクライスソウルをしまいミッドチルダへ戻る。

番外編6話戻る日常（後書き）

スウェンが戦っている時クラウディアでは大変な事が起きていた
次回7話交換条件
スターシステムを使いこなす為スウェンはある事を考える

番外編7話交換条件（前書き）

目覚める過去の記憶そして…

番外編7話交換条件

クラウディア内レッカが艦橋へ戻ると大変な事が起きていた。
「なにこれ…」
目の前ではほとんどの魔導師が魂を抜かれたように倒れていた。そしてその近くにはレッカのよく知る人物がいた。
「ようやく来たんだね。レッカ…」
「えっ…スウェンさんに高町教導官、なんでここに?」
「久しぶりだねレッカ。さっそくだけどその魂くれる?」
「何を言っているんですか…」
レッカが後ずさりをすると後ろからバルディッシュを突きつけられる。
「その魂、私達にくれないかな…」
「皆さん目を覚ましてください」
「目を覚ますのは君の方だよ。レッカ!!」
スウェンから何かが伸びたかと思うとレッカの中へと入って行く。
「うわあああああ」
「さあ君の魂をささげてよ!?」
突然、転移反応がありレイヴンが来る。
「君も僕らと同じになりに来たんだね」
「……」
レイヴンはマグナバレットをなのはに向け何度も引き金を引き魔力弾を撃っていく。
「何しているんですか」
「こいつ等は偽物だ。というより過去の姿と言うべきか…」
「酷いな〜〜私はただ友達になりたいだけだよ」
「次は非殺傷能力をなしにして頭部を撃ちぬく。言え、お前らのボスは誰だ!!」
レイヴンが引き金を引こうとするとなのはは笑う。

「私を撃ち殺したところで何も変わらないよ。それどころか被害者が増えるだけだよ」
「質問しているのはこちらだ。言え、お前らボスは誰だ」
「さあ、誰だろうね。それは君達の中にいるよ。元機動六課そして現在蒼穹部隊長八神はやていや正確にいえば闇の書が私達のボスだよ」
「何だと…」
レイヴンが驚いて油断した一瞬でなのははレイヴンを蹴っ飛ばす。
「グッ…」
「つまり君達は自分達の次元世界を自分達の手で壊すんだ」
「その為には本来の力を取り戻し、本当の闇を手に入れた闇の書が必要なんだ」
「だから君達に生き残る術を教えてあげるよ。闇の書を差し出せ、そうすれば君達は生かしてやる」
レイヴンは抵抗しようとするが体に力が入らない。
「それがお前達の条件か…」
「そうだよ。そして今度こそ真の闇の世界にするんだ」
「そんな世界に人が生きれると思うか？」
「全ての意識が融合して人は個体なんて無くす。そして永久に平和な世界が続くんだ」
なのはが言うと魔法が飛んでくる。
「そんな体で無理していいの、クロノ君」
「ご忠告どうもでもお前達の望む世界なんてだれも望まないな」
「うるさいよ。少し黙って！！」
なのはに蹴られ、クロノは吹き飛ぶ。
「クロノ提督！！」
「平気だ。それより本当の君達の目的は何だ」
「本当の目的それは彼のスウェン・レイクの抹殺だよ！！」
「そして彼に関係したものそれに加担した者は全て滅ぼす。それが私達の目的だよ、クロノ」

クロノはレイヴンとレッカをミッドチルダへと転移させる。
「貴様…」
「さあ殺すなら好きにしろ。もう俺には抵抗する力も残されていない…」
「ならあなたには最後に協力してもらいます。闇の書を手に入れるためにね…」
なのはは笑いながらクロノを見る。その頃、第１管理世界ミッドチルダ
「ねえ～～本当にいいの？」
「ああ、手加減なしで頼む」
「怪我をしても知らないよ」
「平気だ、それじゃ始めるか」
スウェン、フェイト、なのはＢＪを着て模擬戦を始める。
「行くぞスターシステム起動！！」
「了解、スターシステム０１起動」
スウェンは痛みが体中を走りながらも動きを止めることなくなのは、フェイトと戦っていくがやはり痛みが響くのか少しずつ反応速度が遅れる。
「スウェン遅い！！」
フェイトが斬りかかるがスウェンは転移魔法を使い消える。
「ふう～危ない、何とか間に合ったか…」
スウェンの周りを星が回っていた。
「あれがスターシステムか…」
「ユーノさん知っているんですか」
「知ってるも何も僕とクロノ、スカルエッティで造り上げたものだし、本当は聖剣士の力と併用しないと駄目なんだけどスウェンはその壁をなのはとフェイトの模擬戦で超えるつもりだね」
ユーノが言うとなのはがディバインバスターを放つが星に阻まれスウェンへは届かない。
「今のスウェンじゃ０２までは行けるだろうけど０３からは本当に

痛みが激しいからきっとスウェンでも無理だと思う」
「あれは肉体強化の一つなんですか？」
「最初見たときのコンセプトはなのはのあれと同じだったけど一応は肉体強化も入っているんじゃないかな？」
ユーノが言うとスウェンは再び痛みを感じる。
「０２を起動させたんだね」
「その０２や０３って何か違うんですか？」
「０１は防御０２は攻撃それ以降はまだ僕にもよくわからない。でもあれを使いこなせなきゃスウェンは今度こそ死ぬ」
ユーノが言うと傷だらけのレイヴンとレッカが転移されて来る。
「どうしたんですか、レイヴン」
「ティアナか…はやては部隊長はどこだ？」
「今、誰かから連絡があったとかで戻りましたけど…」
「なに！？」
レイヴンは起き上り隊舎へと向かう。
「スバルさん…」
「どうしたのレッカ」
「敵の目的はスウェンさんとそれに関係した者を殺し、闇の書を手に入れる事です」
「えっ…闇の書ってあのはやてさんの？」
レッカが頷くとなのは達の方で凄い爆発が起きる。
「ようやく見つけたぞ…うぐうがあああああ」
スウェン達の前に現れたバン、ウル、ガルは魂が抜かれたように倒れ、砂になり消える。
「何が起きてる…」
「えっ…そうなのわかった…」
フェイトの元にエリオから通信が来て、フェイトは内容を話す。
「時空管理局の魔導師が魂を抜かれたように倒れているんだって」
「こいつらと同じ現象か…」
スウェンはウル達のいた場所を見て言う。

「皆が心配だよ。急ごう！？」
なのはが向かおうとすると、アリサとすずかが現れる。
「なんですずかにアリサが…」
フェイトが驚くと何かが飛んできてフェイトの肩から血が出る。
「二人ともどうしたの？」
「その魂、私達に頂戴？」
「なのは…危ない！！」
スウェンはなのはの代わりに斬られる。
「どうしたの目を覚ましてよ。アリサちゃん、すずかちゃん！！」
「なのはちゃん達こそいつまでこんな無意味な事を続けるの？」
「人を殺してそれで褒められて得意になる。あなたみたいな殺人鬼、友達でも何でもない。早く死んで！！」
「そんな…二人とも」
なのははレイジングハートを落とし、戦意喪失する。
「なのは…その二人の言葉に騙されないで」
「私は…なんで…」
「それじゃ魂はもらうよ。なのは…」
アリサは笑いながらなのはへ何かを伸ばすが誰かに押され、なのはは驚く。
「ユーノ君！！」
「なのは良かった無事なんだね…」
「なんで私なんかのために…」
「僕にとってはなのはは何にも変えられないものだから…」
ユーノの意識はだんだんと遠のいて行く。
「ユーノ！！」
「スウェン…後、任せたよ」
ユーノは魂を抜かれ、倒れる。
「ユーノ君…私は…」
なのはは涙を拭き、アリサとすずかを見る。
「私はあなた達を許さない。私の全力であなた達は倒す！！」

なのははレイジングハートを拾い、戦闘態勢へと入る。

番外編7話交換条件（後書き）

再び世界は最悪のシナリオへと歩み始めたそして…
次回8話消えゆく魂たち
残された希望はただ一つ

番外編8話消えゆく魂たち（前書き）

本当の幸せそれはなにか…

番外編8話消えゆく魂たち

「スウェン君、フェイトちゃんあの二人は私が倒す。だから先に行ってて」
「わかった。気をつけろよ、なのは…」
「私達は先に行ってるから」
スウェンとフェイトは隊舎へと向かう。
「私達を殺す気？」
「必要ならそうするよ…」
「本当に戦争が好きなんだね」
「違うよ。私が戦うのは誰かを守るためであって、むやみやたらに人の命は奪わない」
なのはが言うとアリサとすずかもデバイスを出す。
「でもそれだってなのはがそう思っているだけで実際は違うんだよ」
「確かにそうかもしれないけど私は…！？」
なのはが話している最中にアリサは何かを飛ばす。
「アリサちゃん…」
「迷いは自分を殺すことになる。殺しに来るものは殺さないと自分の命なんて守れないんだよ！！」
「グッ…強い」
なのはは何とか踏ん張るが吹き飛ばされアリサはなのはの前に立つ。
「すずか手を出さないで、なのはは私が倒す。この手でね…」
アリサはなのはの首を掴む。
「かはっ…」
「どう…苦しいでしょ。あなたはこれと同じ事を何度も繰り返したんだよ」
「違う…私はただ…」
「だからそれはあなたの思い込み。現実はそんなに甘くないんだよ、なのは！！」

腹を殴られ、血を吐く。
「ハアハア…」
「どうしたの、この程度でダウン？」
アリサはさらに何度も腹を殴る。
「グハッ…でも私は間違った事はしてないよ」
「あなたが魔法と出会った事自体がそもそもの間違いなんだよ。それに…へえ～～子供がいるんだ」
アリサはもう動かないユーノを見ながら言う。
「あの怒りようからすると、その子はユーノの子供だね」
「あなたには関係ないよ」
「なのは…その子殺してもいいんだよ。ねえ、スウェン、フェイト」
アリサが言うと後ろにはスウェンとフェイトがいた。
「アリサ、なのはを放せ」
「やっぱりスウェン。あなたは邪魔だよ！！」
「俺が邪魔なら殺せばいいだろう。ただし、お前にできればな…」
「聖剣士の力もないのに何時までも英雄気取り？調子に乗るな！！」
アリサは切り裂くがスウェンはいない。
「０４起動…」
「了解０４起動開始します」
スウェンを激しい激痛が襲うが、スウェンは顔色一つ変えずにアリサと互角に戦う。
「ちょこまかといい加減に消えろ！！」
アリサは魔法を放つが全く通らず空に消えていく。
「フェイト…すずかの姿が見えない。なのはの事よろしく頼んだぞ」
「わかってる、なのはには触れさせない」
フェイトはバルディッシュを構えあたりを見渡す。
「フェイトちゃん…私…」
「なのは、なんで子供の事、言ってくれなかったの？」
「みんなに迷惑かけたくなかったから…」
なのはは涙を流しながら言う。

「それで隊舎のほうはどうだったの？」
「酷い有様だよ。もう全員魂を抜かれた後だったし、それに闇の書はもう向こうの手に渡ってる…」
フェイトが言うとスウェンが来る。
「あの二人は引き揚げた…俺たちも急ごう！？」
スウェンは突然、大量の血を吐く。
「平気…スウェン？」
「何でもない。強すぎる力にはリスクが付き物だ、それよりエリオ達に連絡は…」
「ごめん。入れてみる」
フェイトが連絡をするとフェイトの声が返ってくる。
「久しぶりだね。フェイト・Ｔ・ハラオウン」
「あなたは一体、エリオ達は…」
「エリオやキャロその他あなた達３人以外は全て魂を抜かせてもらった。これで私達の願いへ近づいたそれでスウェンに代わってほしいのだけど…」
フェイトはスウェンに渡す。
「スウェン…私達のほうに戻って来てくれないかな」
「言った筈だ。俺はもう聖剣士でもなければ英雄でもない、ただの人間だ」
「でも私達にはあなたが必要なの、お願い戻ってきて…」
「俺にはもう大切なものがある。それを守るために俺は力を使う」
スウェンが答えるとフェイトは笑う。
「クラウディアで待ってるよ…」
その言葉を残し、電話は切れる。
「クラウディアで待つか…」
「どうするの乗り込む？」
「行かなきゃな…世界を闇で包まれる前に…」
スウェンとフェイトは準備を始める。
「なのは…お前は待ってろ」

「えっ…どうして足手まといだから？」
「違う例え世界を闇に包ませなくても、生きる人間がいなければミッドチルダは滅ぶ。だから待ってて欲しいんだ」
「わかったよ。その代わり必ず、勝ってね」
スウェンとフェイトはなのはに見送られ、全ての決戦の地クラウディアへと向かった。

番外編8話消えゆく魂たち（後書き）

世界の行く末を決める最後の戦いいま幕を開く
次回9話蘇る心最後の意思
人が願えば彼は何度でも蘇る

番外編9話蘇る心最後の意思（前書き）

聖剣士それは世界の崩壊を防ぐ最後の希望

番外編9話蘇る心最後の意思

「ずいぶんと遅かったですね…」
「もう我々の計画は最終段階へと入った貴様らでは止められはせん！！」
シャドーフェイトは闇の書を出し言うとスウェンの目から血が流れ出る。
「スウェン…」
「平気だ、何でもない…」
「聖剣士、あなたの中に眠っている力それを呼び覚まさない限り私達には勝てません」
シャドーなのははレイジングハートを構え、スウェンに言うがスウェンはクライスソウルを出さずにただ立っていた。
「スウェン、デバイスを出さないと殺されるよ」
「……」
スウェンはただ何もせずにシャドーなのはを見る。
「あなたは馬鹿ですか、私達を舐めているとしか言いようがありません」
「どう取ってくれても構わないさ、俺はお前の生きる意味を知りたい」
スウェンが言うと魔力砲が撃たれるが途中で消える。
「何の手品か知りませんがあなたに勝ち目はないのですよ。なぜなら魂を抜けばいいからです！！」
スウェンに向けて、赤い液体を垂らしたチューブが迫る。
「スウェン！！」
フェイトはスウェンを押し代わりに受けると他の場所からもチューブが現れ、フェイトは倒れる。
「これでもまだあなたは共存を望むのですか…」
「お前はこれで満足なのか…」

「どう言う事です…」
「この世界に生を受けたなら何かしたいことぐらいあるだろ…」
スウェンが聞くとスウェンの右腕は斬り落とされる。
「あなたはもう普通の人間なんです。聖剣士でもなければ魔導師でもない単なる弱者なんですよ」
「確かにそうかもな、でもな俺は一度だって自分が特別だと思った事はない。それになのはやフェイトはこんな俺でも優しくしてくれただから頑張れるんだ」
スウェンが言うと今度は左腕を切り落とされる。
「無駄だ。今の俺には痛みを感じない」
「聖剣士の力ですか。あなたは結局その力に頼らなければ戦う事さえできない」
「確かにお前達から見ればそう見えるかもしれない。俺が戦えるのは守るべきものがあるからだ」
スウェンが言うとスウェンの周りを虹色のカーテンが包む。
「何だそのカーテンは!?」
シャドーなのはの頭に声が響く。
「止めろ…私を惑わせるなあああああ」
「聞こえただろう、生を望む人々の声が…」
「そんな事私には関係ない。全ての人間の意識が融合すれば正しき闇の世界が来るのだからな」
「何故、そこまで闇の世界にこだわる?」
スウェンが聞くとシャドーなのはの全身から血が出る。
「知りたいか…私達をつくった人間に復讐する為だ」
「例えその願いが叶ったとしてもお前はどうせ消えるんだろ」
「私はこの世界を闇で包むためにここにいる。例えこの身が砕け散ろうとも世界は闇で包む」
シャドーなのはは最期に力を振り絞り、スウェンに向けてスターライトブレイカーを撃つがスウェンには届かず血を全身から出し倒れる。

「ククク私もここまでか…なら私に勝った褒美だ。ヒントをやる、この世界を救うな…」
「早く言え、もう時間はないんだ」
「最後の意思そして蘇る心これがヒントだ、せいぜい頑張るんだな」
シャドーなのはは消える。
「もう分ってるさ…クライスお前なんだろう、この世界を消滅させようとしてるのは…」
「何の御冗談ですか。マスター？」
「ノルンから聞いた。お前は人間の負の感情からつくられそしてそれと反対の想いで強くなるデバイスそしてその時にも同じ事があったんだろ。魂を抜きその魂をもとにお前は作られた」
スウェンが言うとクライスはスウェンの手から離れ肉体を持つ。
「一体何故それに気付きながら今まで放置していた？」
「こんな事を考えたくはなかったからだ。それにお前は俺の大事なパートナーだしな」
「そのせいでこんな大勢の人間を殺す。あなたは英雄失格ですね」
「前にも言ったろ、俺は英雄でもなけりゃ神様でもない。それに人は信じるに値するものだと思う…」
スウェンが言うとクライスは自分の生まれた経緯を話す。
「私はあるプロジェクトの一環として作られました。名を聖剣士プロジェクト」
「！！！！」
スウェンは驚く。
「私をつくりだした者は同時に私を扱えるものを作りました」
「それが…星降る世界の民…」
「いいえ、そうじゃありません。聖剣士プロジェクトで造られた者の名はゴッド現在名はスウェン・レイクです」
「それじゃつまり俺は…そのプロジェクトにより造られたのか…」
クライスは頷く。
「ですがあなたには一つだけ失敗がありました」

「失敗だと…」
「それは人間の感性を持たせた事です」
クライスが言うとスウェンはクライスを見て言う。
「確かにその人から見たら俺は失敗作なんだろうな、でも俺は感謝する。その人が造ってくれなかったら俺は人の死や人の想いそれに色々な感情を知らずにいたんだからな」
「あなたはこの世界が憎くないのですか」
「ああ、皆が幸せに暮らす世界なんでそれを憎む必要がある。俺の生まれはどうであれ今、俺はこうしてここで生きてるそれが一番の幸せじゃないかな」
「あなたを見てわかりました。死んでいたのは私の心だったんですね」
クライスは突然、光り出し徐々に消えていく。
「マスターと一緒にいてわかった事があります。私もこの世界が好きと言う事が…」
「クライス…」
「だからマスターあなたは生きてください。何があろうと大切なものを全て守るために…」
「ああ、約束するだからクライスお前も人を信じろ」
スウェンが言うとクライスは完全に光となり消えた。

番外編9話蘇る心最後の意思（後書き）

本当の平和それは人が望む限り続いて行くのかもしれない
次回番外編最終話みんなの信じた人の心
想いはやがて一つになり世界を支える

番外編最終話皆が信じた人の心（前書き）

人が生き続ける限り世界も鼓動する

番外編最終話皆が信じた人の心

あれから4年後、みんなの怪我も完治し、犯罪も減り、ミッドチルダには平和が訪れた。
「失礼します。高町なのは、ただいま着きました」
「長旅ご苦労やったな。明日からは休暇やしっかり休めるんやで」
はやてに言われなのはは出ていく。
「なのはママ～～」
「あれヴィヴィオ今日はフェイトちゃんと一緒に出かけるんじゃなかったけ？」
「フェイトママはデートだよ～～」
「ヴィヴィオ、デートじゃなくって仕事だからね」
フェイトは顔を赤くしながら来る。
「あっなのはお帰りなさい。どうだった、エルガストのほうは？」
「一応、レイヴンくん達が頑張ってるから平気だとは思うけど…」
なのはが話してると電話が鳴る。
「もしもしなのはです」
「もう帰って来たのか」
「はい向こうでする事は済ませましたし…」
「そうかなら報告ぐらい来たらどうだ…」
クロノに言われなのははすぐさま行く。
「すいませんでした」
「それとユーノとスウェンだが今日一度こっちに帰ってくるらしい。たまにはユーノと二人で一日ぐらいゆっくりしたらどうだ」
「それじゃ、そうさせてもらいます」
なのはは部屋を出ていく。その頃スウェンとユーノ
「スウェン起きてよ。もう着くよ」
「はっ…今日は久しぶりにミッドチルダに寄れるのか」
「フェイトに会えてうれしいんでしょ」

「そう言うユーノだってなのはに会えてうれしいんでしょ」
二人はお互いに笑い合い降りる。
「それにしても便利になったね」
「時空トレインか確かに便利だよね」
二人はお土産を持ち、クロノの元へと行く。
「ただいま帰りました」
「御苦労、スウェン、ユーノ今度はどこに行くんだ」
「今度は第3管理世界ヴァイゼンに行きます」
「だが今日と明日ぐらいは家族で過ごせ、なのはやフェイト表には出さないが結構心配してるからな」
クロノに言われスウェンとユーノは無限書庫へと行く。
「ふう～～やっぱりここ落ち着くな～～」
「時空管理局に入りたての頃はよくサボってここに来てたもんね」
「うっ…痛いとこ突くなよ～～」
スウェンが言うとユーノは笑う。
「でも本当によかったの、スウェン」
「何がだ？」
「なのはじゃなくってフェイトでって事だよ」
「別に友達の輪が崩れる訳じゃないんだし、僕が選んだんだ。後悔はないよ」
スウェンが言うと電話が鳴る。
「はい、もしもし…」
「スウェン聞こえる？」
「どうしたのフェイト？」
「今すぐ思い出の場所に来てくれないかな」
そう言って電話は切れる。
「ユーノ、僕はちょっと用事があるからまた後でね」
スウェンは大急ぎで走って行く。
「ごめん…待たせちゃったかな」
「全然待ってないから平気だよ」

スウェンとフェイトはベンチに座り話し合う。
「スウェン今度はどこの世界に行くの？」
「今度はヴァイゼンだよ。でも一応明日はお休みとってあるし、フェイトと久しぶりに一緒にいられるよ」
スウェンは笑いながら言うとフェイトは涙を流し抱きつく。
「スウェンできれば離れたくない」
「そう言われても…僕にはどうする事も出来ない、でもその代わり受け取ってくれないかな」
「えっ…これって…指輪？」
フェイトは顔を赤くして驚く。
「ごめん…別に深い意味はないんだ。ただフェイトには持っておいてほしい、僕が必ず帰るという証に…」
「うん…ありがとうスウェン大事にする。それとね、私のお腹の中には赤ちゃんがいるんだって」
「えっ…本当？」
スウェンは驚きながら聞くとフェイトは笑顔でうなずく。
「だから名前を決めておいてほしいんだ」
「えっと僕に？」
「だってスウェンがお父さんなんだから」
「そうなんだ…でも僕はこれからもっともっと忙しくなるし、子供の世話だってフェイトに任せるしかないしそれに…」
スウェンが言いかけるとフェイトはスウェンにキスをする。
「私の気持ちは変わらないスウェンずっと待ってるだから…」
フェイトが涙を流しながら言うとスウェンは再び指輪を渡す。
「本当にごめん僕まだ心のどこかで迷ってたみたいだ。でも今ならはっきり言えるよ、僕と結婚してください！！」
フェイトは涙を拭き笑顔で答えた。それから2年後二人は結婚しミッドチルダで時空管理局に勤めながら暮らしていた。
「スウェン～～～」
「どうしたのフェイト？」

「仕事は終わった?」
「うん今日の仕事は終わったけど…」
スウェンが言いかけるとフェイトはスウェンの腕を持ち走り出す。
「ちょっと、フェイト」
「今日は二人でご飯食べよう」
スウェンはフェイトに引っ張られ家へと着く。そしてそれからスウェンは手紙を書く。
「君が命をかけて守った世界、人はいずれ死ぬものだけど人は新たな命をはぐくむ事ができる。それこそが僕には希望に見えるし大切な人と限りある時間を歩むそれこそが人の幸せだと思うんだ。そして僕の見つけた人の心そのものなのかもしれない。クライス、人は時には間違うでも必ずみんな変わって行ける自分や他人の事を信じたらきっと…」
「スウェン…そろそろ行くよ」
「うんわかった…」
スウェンは手紙を裏にしフェイトのほうへと向かった。

番外編最終話皆が信じた人の心（後書き）

これで聖剣士編は完結です次回からは主人公が変わり登場人物もかなり変わります
世界観は聖剣士編より約４年後舞台は第１管理世界ミッドチルダ主人公はスイクと言う少年です登場人物はなのは、ユーノ、ヴィヴィオ、ヴィータ、スバル、ティアナです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1543n/

真・魔導戦記Seoul

2011年4月8日16時46分発行